

労働者協同組合法の活用とその実践

～自治体との協同の取り組み～

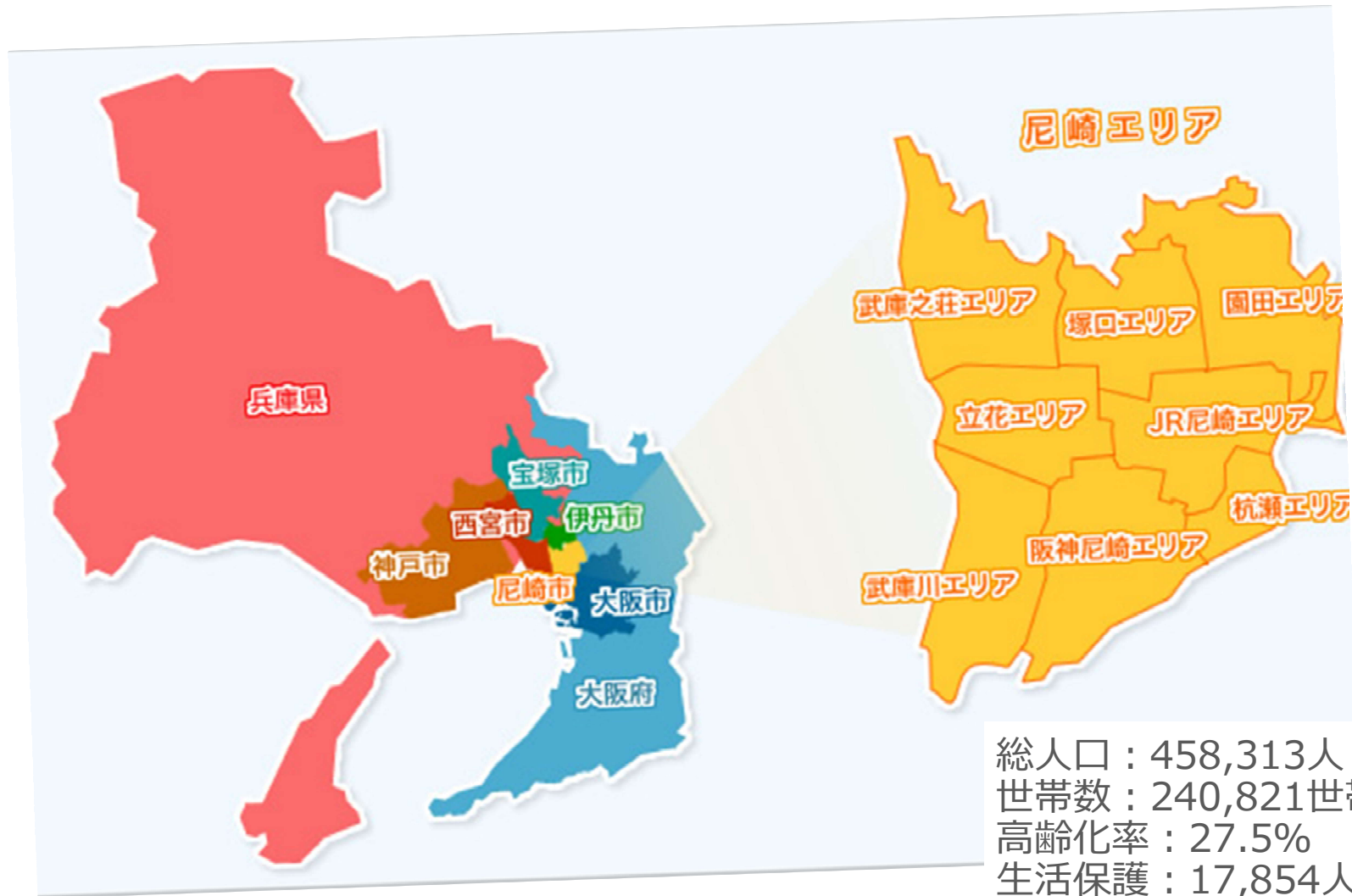
 **hanshin workers co-op**

組織概要

名 称	労働者協同組合はんしんワーカーズコープ
所 在 地	兵庫県尼崎市建家町82（本部）＊その他5拠点
事 業 内 容	訪問介護・居宅介護支援事業 児童発達支援事業・放課後等デイサービス 生活困窮者等就労準備支援事業 高齢者生きがい就労事業 生活総合事業（造園・HC・リフォーム等） ＊その他、地域活性化の取り組み
就 労 者 数	30名（組合員26名）
出 資 金	525万円（1口1万円）
設 立	2014年4月

設立経緯

- ・ 前職のワークスコープを退職した7人が集まり起業
- ・ 1年間は別のWCに加入し設立準備（資金作り）
- ・ トップダウンではなくフラットでボトムアップ型の運営
- ・ 「よい仕事」を探求し地域で仕事を創り出す
- ・ 自分たちが楽しく、やりたいことを実現する
- ・ 150人規模の共同体を目標に協同ではたらくを探求





地域共創LAB.

自治体との関係づくり

- 認定就労訓練事業（中間的就労）をきっかけに福祉課から相談
- 関西国際大学の学生と地域課題解決のフィールドワーク
- 優先発注による業務委託（パンフレット配布）
- 生きがい就労事業に関する相談・依頼
- 重層的支援推進担当から参加支援事業の相談・依頼

法律の目的に書かれている「持続可能で活力ある地域社会の実現」や組織風土（自治共同体）に、行政課題を一緒に考えるパートナーとして期待されている

高齢者の生きがい就労で地域の課題解決に

- 地域の様々な課題は多様化しており行政の支援だけでは限界がある
- 地域課題は担い手の創出が課題
- 高齢者や生活困窮者の方が支援されるだけでなく支援する側へ
- 自立支援だけでなく、協同して「暮らす・はたらく」が必要
- 地域の中に「居場所と役割」を創出し必要とされている実感
- 「はたらく」事を中心に置いた地域づくりが地域の課題解決に

行政（高齢介護課）の課題と私たちのこれまでの取組や考え方が一致し、行政と協働で事業構築を勧めていくことに

高齢者生きがい就労事業について

- 尼崎老人福祉工場として、昭和57年よりシルバー人材センターが受託しスタート
- 最盛期には300人の利用者がいた
- 直近では20数名と減少
- シルバーの会員にしか周知していなかった
- 尼崎市として廃止の方向であった
- 指定管理者制度で運営（1400万/年）

高齢者生きがい就労事業について

- 令和4年度4月にプロポで業務委託
- 奈良で活動されているあをに工房（株）と共同体
- 指定管理者制度ではなく、施設の管理運営業務と就労的活動支援コーディネーターを配置する業務委託
- 5月7日より3年間のモデル事業としてスタート
- 名称を「尼崎はたらくらボ」に変更

就労的活動支援コーディネーターとは

就労的活動の場を提供できる民間企業・団体等と就労的活動の取組を実施したい事業者等とをマッチングし、高齢者個人の特性や希望に合った活動をコーディネートすることにより、役割がある形での高齢者の社会参加等を促進する。

事業内容

尼崎はたらくラボ2箇所での取り組み

①生きがい就労の実施

- ・生きがい就労の情報収集、周知啓発業務
- ・生きがい就労の獲得、利用者マッチング、データ収集
- ・産業界と連携し仕事の獲得

②生涯学習やセミナーの実施

- ・まちづくり講座や介護予防セミナー

③多世代が交流できるサロンの実施

- ・交流できるスペースの設置
- ・フリースペース、イベントの開催など

④施設の管理運営

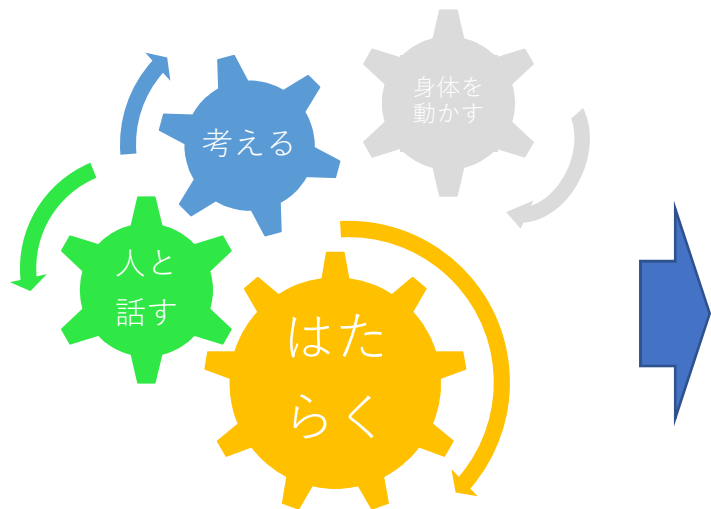




事業転換後の利用者の声

- 利用者の声

自宅にいるよりも、仕事に来る方が、生き生きする。
行く場所があると、家の片づけを早く終わらせたり、化粧もして嬉しくなる。
良い人ばかりで環境がよく、同じ思いで来ているため話しが合う。
仕事をした分よく寝られる。
地域の体操の場に行きたくないが、ここなら来たい。



生きがい創出

10月2日の神戸新聞にも掲載



事業転換後の地域の反応

地域包括支援センターの声

- ・認知症の人を支える取組として、その人が集える場所というのは、今のところ認知症カフェしか無いが、就労的活動ができる場所として、認知症の人を受け入れることができるなら、その人の残存能力の維持と尊厳の保持につながるのではないか。
- ・引きこもりがちの男性高齢者に対し、通いの場へ行くよう案内しても、体操をするといった目的では行きたがらない。しかし、「はたらく」といったキーワードであれば、参加してもらえる人が多いのではないか。
- ・8050の50の人も、この事業に参加することが出来ればありがたい。
- ・実際に、引きこもりの高齢者にこの事業を紹介したところ、この事業なら参加したいという高齢者がいた。

社会福祉協議会 (生活支援コーディネーター) の声

- ・「はたらく」といったキーワードがきっかけとなって、地域活動の立ち上げ、引きこもりがちの高齢者への参加支援に寄与するのではないか。
- ・高齢者だけでなく、多世代交流の場としての機能を持つと高齢者の生きがいにも繋がるのではないか。
- ・生活支援コーディネーター（社協）とは違う民間事業者に就労的活動支援コーディネーターを担ってもらうことで、それぞれの強みを活かして活動することが出来る。
- ・地域で生きがい就労を実施できるよう、就労的活動支援コーディネーターと一緒に動いていきたい。

地域の集いの場の声

- ・男性高齢者は、本当に集いの場へ参加しないため、「はたらく」といったキーワードを用いた集いの場であれば、呼び水になるかもしれない。
- ・市内に老人福祉工場の2箇所だけでは、通うことが出来ない人も沢山いるため、各地域で生きがい就労を実施している場所を作ってほしい。
- ・75歳以上になると仕事をしたい気持ちがあっても仕事がないため、自分が高齢者なんだと社会から取り残された気持ちになることがあるが、このような場所を作ってもらえれば、いつまでの若い気持ちでいられるとともに、まだ誰かの役に立てる（活躍できる）という自信にもなる。

市報やチラシで事業広報をおこなったところ・・・。



一週間で**80件**もの高齢者からの問い合わせがあり、ほとんどが利用希望者

ニーズ

大

現状と課題

課題解決と目指すべき方向

- ・ 市報掲載にて100件の応募、現在20名→40名に。
- ・ 利用者平均75歳（最高齢87歳）女性32名、男性8名
- ・ 平均15,000円から30,000円の報酬
- ・ 業務確保が喫緊の課題（産業界との連携）
- ・ 地域の中（サロンや自治会）で同じ様に実践できるか
- ・ 重層的な課題を持った対象者の場として機能させられるか

モデル期間中に様々なニーズに応える実験ができるか。最終的には地域の中で支え合う仕組みとして「生きがい・はたらく」場を創り出すこと。住民自治を可能にする行政・民間の協働

今後の事業展望

- 「はたらく」といったことをキーワードとしてまちづくりをしなければ、ボランティアというワードでは、担い手創出に限界がある。
- これからは、内職作業だけでなく、訪問型サービスBなどを実施する団体の立ち上げにもつなげていきたい。
- まちづくり・仕事おこし講座を通じて、担い手養成をすすめたい
- より虚弱な高齢者に参加してもらうには、オリジナル商品などを開発し、作業期限などが無いものを用意する必要もある。
- 今後は、通所介護や介護施設での生きがい就労（内職作業など）も実施したいというニーズも増えていくのではないかと。
- 「はたらく」ということは無限大。人生の最期まで誇りを持てる事業を目指し、高齢者は支えられるのではなく、支えるのが当たり前の中。

協同労働的な団体や法律を活用し、地域住民の主体性・自治を通じて、課題解決型の事業活動が増えることで持続可能な地域づくりを進めていきたい。